九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本語研修コースにおける「三者面談」の実施とその効果

吉川, 裕子
九州大学留学生センター : 准教授

https://doi.org/10.15017/4777919

出版情報：九州大学留学生センター紀要. 16, pp.13-21, 2008-03. 九州大学留学生センター
バージョン：
権利関係：

九州大学留学生センター紀要，2007，第16号，13－21
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2007, No.16, 13-21

日本語研修コースにおける「三者面談」の実施とその効果

Interviews with supervisors in Intensive Japanese Course: Methods and Effects

吉　川　裕　子*

要　旨

九州大学留学生センターの日本語研修コースは、研究留学生を対象に年に２回開講される予備教育コースで、日常生活に必要な日本語能力の養成と共に専門教育の現場への適応の支援を目標としている。本コースでは、2005年度以降、日本語研修生・進学先の大学院の指導教員・コースのコーディネーターの三者による「三者面談」を予備教育期間中に実施している。三者面談の目的は、上記三者で研修生の日本語の学習や今後の研究生活などについて話し合うことで、日本語学習に方向性を持たせ、コース終了後の研究室への移行を円滑にすることである。過去５期にわたり68名の研修生を受け入れ、全員に面談を実施してきた。本稿では、面談とその後の研修生への調査を基に、面談の内容を分析し、その効果について考察した。三者面談には、その方法にさらに改善を図るべき面も残ってはいるが、実施の効果が確実に現れていると言える。

【キーワード】
留学生支援　三者面談　予備教育　研究留学生　指導教員　コースコーディネーター

１．はじめに

日本語研修コースは、研究留学生を対象とし、大学院へ進学前の予備教育を行うコースである。研修生は主として文科省の国費留学生で、そのほとんどは来日前に日本語学習の経験がない。専門教育で留学生を受け入れる指導教員が研究留学生の予備教育を希望した場合、渡日後半年は留学生センター所属の研修生となり、半年の研修期間中は日本語研修コースのコーディネーター（以下コーディネーター）が受け入れ教員となる。研修期間終了後は各研究室の研究生に戻り、大学院へ入学していく[1]。

この予備教育の場としての日本語研修コース（以下研修コース）には、二つの目標がある。一つは、日常生活に必要な日本語能力（主に聴解と会話力）を養成し、日本語を使って研究室の日本人とコミュニケーションができるようにすることである。もう一つは、日本社会および専門教育の現場に円滑に適応できるようにすることである。

本稿は、上記研修コースにおいて過去５期にわたり実施してきた「三者面談」について、その実施方法を報告し、明らかになったことを分析、考察するものである。

２．三者面談開始の経緯

研修コースでは、進学予定の研究室と研修生を結ぶ活動として、1990年から「研究室訪問」を行ってきた。これは、コース期間中に１回、指定の日時に一斉に学生が研究室に出かけて指導教員と話し、その結果をレポートするという活動である。この活動は、一斉に実施していた

* 九州大学留学生センター准教授

ため、指導教員の時間的な都合によっては、研修生が指導教員と直接対面できない場合もあり、指導教員が不在の場合、研究室にいる他の先生や先輩が対話の相手となった。この活動は、研修生にとっては研修コース期間中に指導教員に面会し研究室の様子を知る機会となっていたようだが、コーディネーターにとっては訪問の模様は学生の報告を通してのみ伝わるに過ぎず、指導教員と研修コースの間に相互の行き来を生むものではなかった。

研修生（研究留学生）に対して更にきめ細かな支援体制を敷いていくために、研究室訪問による研修生と指導教員の対話だけでは補えない部分を、コーディネーターが関わることにより改善できるのではないか、これまでの形式的な研究室訪問より一歩踏み込んで、研修生・指導教員・コーディネーターの三者による面談を実施すると効果的なのではないかという意見が留学生センターの中に起こっていた。2005年４月に筆者がコーディネーターとなり、三者面談を開始した[2]。

３．三者面談

３－１　目的

面談の目的は、「研修生、指導教員、コーディネーターの三者で、研修生の今後の研究生活に必要なことなどについて話し合うことによって、研修コースでの日本語学習に方向性を持たせ、コース修了後の研究室への移行を円滑にする。」ことである。

３－２　実施方法（2007年度現在）

1）コース開講後１～２週が経過した時点で、留学生センター事務から三者面談実施案内のメールを指導教員に送付する。初めに事務から案内を送付するのは、この面談が留学生センターの公的な活動であるという位置づけによる。

2）コーディネーターが指導教員１人ずつにアポイントメントを取る。電話で連絡が取れない場合はメールに切り替える。面談可能日を伝え、複数の希望日を記入してもらい、日程の調整をする。

3）研修生に実施日を伝え、過去の面談での話題の説明をし、質問を考えさせる。

4）開講後３週目～４週目に面談を実施する。毎日１組～２組、１組の面接時間は約１時間。基本的にコーディネーターの研究室で放課後に行う。当日はお茶を準備する。

5）言語は、英語と日本語。指導教員によって差があり、日本語が多くなる場合は、コーディネーターが簡単に英語で研修生に説明し、研修生には面談後に再度詳しく内容を説明する。

6）次の点を話題として取り上げる。主な話題は前もって事務からの案内の中で、また予約連絡の時にも指導教員に伝えておくが、面談の流れの中で出るものもある。

・研修コースの目的の説明（初めて研修コースと関わる指導教員に対して）
・研究室の様子（他の留学生・チューター・先輩の様子、研究室内の言語）
・研究生活で必要な日本語（講義・ゼミでの日本語使用状況）
・研修生の進路（修士課程か博士課程か）
・大学院の入試の有無（有る場合は時期と形式）
・研修コース期間の日本語学習の到達目標を確認
・研修コースのスケジュールとコース終了前の発表会[3]の説明

・指導教員から研修コースへの要望、学生から指導教員への質問
・指導教員と研修生の今後の連絡方法と指導教員のオフィスアワーの確認

7）指導教員にコーディネーターからお礼のメールを出す。これによって以後コース期間中に、メールで連絡を取り合うことが可能な体制を作ることができる。

8）面談の翌日の昼休みに研修生と会って補足説明をする。

3－3　過去5期の実施数

2005年度春学期から2007年度春学期まで5期にわたり、全研修生（計68名）に実施した。

各期の内訳は表1の通りである。

表1　研修生の学期別人数

	春　学　期		秋　学　期	
2005年度	16人	11か国	13人	11か国
2006年度	17人	13か国	12人	9か国
2007年度	10人	10か国	13人実施中	12か国

4．明らかになったこと

面談から明らかになったことは、概ね下記の4点（1．研修生の進学状況、2．大学院で必要な日本語、3．指導教員が望む日本語力、4．研究室と指導教員の状況）にまとめることができる。

4－1　研修生の進学状況

研修コースの留学生の進学先は大きく3つに分かれている。過去5期に関しては表2の通りである。進学先（修士課程か博士課程か）は、留学生の研究歴・研究内容等により、来日後に決まる場合がある。

表2　研修生の進学先（予定）　（人）

	修士課程			博士課程			教員研修[4]
2005年度	17	理系	12	10	理系	9	2
		文系	5		文系	1	
2006年度	16	理系	11	8	理系	7	5
		文系	5		文系	1	
2007年度前期のみ	7	理系	4	3	理系	3	0
		文系	3		文系	0	

表2で明らかなように、どの年度も修士課程が一番多い。

4－2　大学院で必要な日本語

すべての研究室において、日常的な日本人とのコミュニケーションには日本語が必要とされている。一般的に修士課程では講義は日本語で行われる（英語で講義が行われる大学院特別プログラムの場合は別）。ゼミにおいては、留学生は英語での発表が認められるが、日本人学生の発表は日本語であり、ディスカッションも日本語で行われる。したがって、これらの日本語を理解する必要がある。博士課程の場合は英語で研究が行われるため専門の日本語は必要ない。また、学府によっては入学試験で日本語の作文等を課すところがある。

大学院で必要な日本語を表3としてまとめておく。

表3　大学院で必要な日本語

1．研究室の日本人との会話　事務室での会話
2．講義は日本語（専門語彙は英語併用）
3．ゼミでの日本人学生の発表は日本語
4．英語のテキストを使用する場合もディスカッションは日本語
5．入学試験（一部の学府で）

4－3　指導教員が研修生に望む日本語力

4－2で述べたように専門の講義・ゼミにおいて修士課程では日本語が必要である。しかし、指導教員が研修生に対して期待しているのは、

先ず何よりも日常生活で困らない会話力、特に研究室で日本人との会話ができるようになることである。その他に、日常のお知らせメールが読めること、駅の案内など生活していくための日本語が読めることなどが挙げられる。一方、専門日本語に関しては、研修コース修了後に研究室で手当てをするという考え方が一般的である。ただし、学府によっては入試の日本語の準備（日本語の作文や日本語による面接)、漢字語彙力の養成が研修コース期間中に必要とされる場合がある。

指導教員が研修生に対して望んでいる日本語力を表４としてまとめておく。

表４　指導教員が研修生に望む日本語力

１．日常生活で困らない会話力
２．研究室で日本人学生と会話できる力
３．日常のお知らせメールが読める
４．日本語の講義もあるので、講義についていく力(将来的に)
５．入試のための日本語・漢字語彙の力

４－４　研究室と指導教員の状況

研究室、指導教員の状況には、面談を通して以下のような点で差異を見ることができた。

・研究室の学生数および留学生数
・留学生指導の経験
・指導教員の留学経験の有無
・英語力
・忙しさ
・九大に在職している年数

留学経験があり留学生指導の経験も豊富な指導教員の場合は、面談が指導教員主導でスムーズに進む傾向が見られることから、留学生の研究室への適応は、進学先の研究室の環境によるところも大きいことを窺うことができる。

４－５　まとめ

大学院における日本語使用状況には以上のような違いが見られたが、「研究室では日本人と日本語を使ってコミュニケーションできること」は共通して要求されている。これは、研修コースの目標と一致するところである。一方で専門の日本語に関しては、研修コース修了後に各研究室で指導や手当てが行われることがわかった。

５．研修生の声

三者面談の実施直後に研修生に対してアンケート調査を行った。アンケートでは、①面談は有意義だったか、②面談前後で気持の変化があったか、③今後へのアドバイスを問い、回答は英語で自由形式となっている。「面談が有意義だったか」という質問には、68人中67人が「Yes」と答え、高い評価が出ている。(「No」と答えた一人は指導教員とは以前から交流があるためと書いている。)

５－１　有意義だと思う理由

有意義な理由を表５としてまとめる。

表５　有意義だと思う理由

自由記述形式（人）

将来に関して	専門の研究に関する情報の入手	19
	入試に関する情報の入手	11
	疑問に思っていたことへの回答	5
研修期間に関して	現在の状況に対する先生の理解	11
	日本語学習の目的が明確になった	5
指導教員との関係	なかなか会えない先生に面会できた	11
	先生の人柄を知ることができた	8

以下は、研修生へのアンケートの回答例（英文の和訳は筆者）である。

〈将来に関して〉

・将来の研究プログラムを知る機会となった。
・入試についていい雰囲気の中で聞くことが

できた。
・入試では何が必要かを先生からコーディネーターに伝えてもらえた。
・来日して以来知りたかった情報を得ることができた。
・先生に直接聞きにくいことを聞くことができた。
・先生は英語が話せないので、以前から疑問に思っていたことに関してコーディネーターを通して質問でき、回答が得られた。

〈研修期間に関して〉
・日本語コースの様子と自分の日本語のレベルを先生に知ってもらえた。
・先生は日本語に励むように言われたが、努力していることが分かってもらえたと思う。
・日本語コースの目的について確認できた。

〈指導教員との関係〉
・指導の先生に公式に挨拶ができた。
・研究室を一人で訪問するきっかけが得られた。
・打ち解けた雰囲気の中で先生の人柄と自分に対する気持ちが理解できた。

5－2　面談前後の気持ちの変化

次に、「面談前後の気持ちの変化に」関して表6としてまとめる。日本語学習に関するもの・将来の研究に関するもの・指導教員に対するものの3グループに類別できる。

表6　面談後の気持ちの変化

	記述にみられる気持ちの変化の語彙	人数
日本語学習	頑張る・全力を尽くしたい・大切だ・集中できる	16
将来の研究	安心感・確信・自信・楽観的な気持ち・勇気	11
指導教員に対して	親近感・リラックス・満足感・安心感・信頼	18

以下は、研修生へのアンケートの回答例（英文の和訳は筆者）である。

〈日本語学習〉
・入試に日本語が必要なことが分かったので、熱心に日本語を勉強しようと思う。講義は英語で行われるので以前はそんなに日本語の学習を真剣に捉えていなかった。
・研究プロジェクトや他の学生とのコミュニケーションのために日本語が必要であることが一層理解できた。

〈将来の研究〉
・近い将来に関する情報が得られ、安心した。
・入試の日本語を心配していたが、そのために手当てしてもらえることがわかり、安心した。

〈指導教員に対して〉
・先生とのいい関係を築くのに役立った。メールでコンタクトを取ることはあったが、面談によってより親しみを持つことができた。
・面談前の連絡はメールのみだった。先生との間に何か不都合なことがあるからかと心配していたが、面談後に心配は消え、外国で長期間研究する気持ちになれた。
・日本語と専門のバランスに悩んでいたが、先生が日本語コースのことを理解し、今は日本語に集中するように言われたので安心した。(学内募集[注1参照]の研修生)

5－3　まとめ

三者面談はほとんどの研修生にとって、指導教員に正式に挨拶する機会となっている。コーディネーターを介してその機会が確保されることは、留学生にとって意義深いことであろう。

面談を通して6か月後の様子が明らかになることへの評価が高い。研修生の来日の目的は研究であるから、研究に関する具体的な情報は大

いに関心のあるところである。例えば大学院の入試に関する質問は、不安には思っているがなかなか聞けない質問のようで、第三者であるコーディネーターが研修期間の日本語教育と関連させて質問を切り出すことによって研修生も質問しやすくなる。その結果具体的な様子が明らかになって安心するようである。それは「先生に直接聞きにくいことを聞くことができた」という声にも窺うことができる。

指導教員から日本語学習に励むように激励された研修生は、新たに努力の決意をする。特に学内募集で研修コースに入っている研修生（既に研究室所属の留学生）は、研究室の他の学生が専門教育を受けている時間に日本語の勉強をしていることに対して不安を感じているが、先生の「今は日本語に集中するように」という意向が再確認できると大変安心し、面談以後安定した気持で日本語学習に取り組めるようになる。

気持の変化としては、「安心感」を得るということに集約できる。さらに、「いい雰囲気の中で」とか「打ち解けた雰囲気の中で」面談が行われることも研修生にとっては大切な要素であることがわかる。

６．５期分の実施を通して見た効果

６－１　５期にわたる推移

三者面談は、学内で前例のない取り組みであるため、コーディネーターとしてはその方法と内容において試行錯誤を重ねつつ、５期にわたり在籍研修生の指導教員68名に対して実施した。１期目は実施に懸命であり、他所に目を配る余裕はなかったが、２期目を終える頃、つまり１年を通して見て、各学府の事情が見えてきた。２年目にようやく全体が見え、面談内容の焦点を絞ることができるようになった。

３年目の現在、研修コースにおけるきめ細かな指導は過去の指導教員から評価を受け、三者面談は留学生を受け入れる指導教員から認められる活動となりつつある。現時点において、留学生センターの研修コースにおける三者面談の取り組みは成功していると言っていいだろう。

以下に、三者それぞれにどのような効果がみられるかについて述べる。

６－２　研修生にとって

三者面談が研修生にもたらす最大の効果は、今後の研究生活に対する「安心感」だと言うことができる。研修生は、来日直後には研究者としての日本での成果に希望と不安を抱いている。どのような入試が課せられるか、日本で研究を達成できるか、指導教員はどんな人物か、研究を中断して日本語に専念していていいのか、などの疑問が主な不安の元となっている。面談の場で指導教員から直接具体的に今後のことについて話を聞くことで近い将来の様子がわかり、研修生は精神的に安定する。これは、既に研究室に所属している研修生にとっても同様である。彼らも研究室に他の学生がいる中で自分のことだけを聞く機会はなかなかない。面談後の研修生は日本語コースの期間に自分がするべきことを知り、日本語の学習に集中できる。特に、日本語を頑張るように直接励まされた研修生には積極的に学ぶ態度が顕著に見られる。

大学院入学前の予備教育と一口に言っても実は進学先の状況は４－１から４－３でみたように、その内状は一人ずつ異なっている。修士課程進学か博士課程進学か、講義及び研究で使われる言語は日本語か英語か、大学院の入試をどのような形式で受けるか、などの点で異なる。三者面談によって一人一人の実情に合った個別の指導が受けられるようになる。

６－３　コーディネーターにとって

①　コースの運営

コーディネーターにとって三者面談は学生の背景を知るいい機会となっている。得られた情報のうち開示できる情報はチームワーク体制の中で教師陣と共有する。コース担当のすべての教師が共通理解の下に毎日の日本語教育を行うことで、研修生の日本語学習へのきめ細かな対応が可能となる。この協力体制のコース運営にもたらす効果は大きい。

②　研修コースの周知

三者面談は指導教員に研修コースの日本語教育を知ってもらういい機会ともなっている。特に留学生の受け入れ経験の少ない教員の場合は、コースの内容を知らないことが多い。研修生がどのようなコースで日本語を勉強していて、どの程度の日本語を身につけて半年後に研究室に来るかを予め知っておいてもらうことは、日本語到達レベルに関するコース側と指導教員とのギャップを少なくするのに役立っている。コース終了時の日本語力が比較的低かった研修生に関しても、感謝の手紙が届くことがある。

③　指導教員との連絡

面談後には指導教員と連絡が取りやすくなる。特に専門に関わることで相談の必要な場合に、即座にメールで指導を仰ぐことができる。下記の１）から５）は面談後の相互連絡の主な事例である。

１）面談実施後のお礼のメールに対して、多くの場合返信が届く。
２）面談時に話題となった資料が後から届く。(論文、専門書、入試関係資料など)
３）進学後のキャンパスが離れている場合、宿舎の問題で相談や依頼のメールが届く。
４）発表会のスピーチの準備段階で、専門の語彙及び内容について援助をお願いできる。
５）適応に関わる心配が認められた際に、二者、または研修生を交えて再び三者で面談を行う。

６－４　指導教員にとって

指導教員にとって三者面談は、研究室に受け入れる前から学生と接触する機会になる。その後コーディネーターと必要に応じて連携しながら学生を支援できる体制は、半年後のスムーズな受け入れに役立っていると考えられる。「６か月は留学生センターで日本語教育を。留学生の受け入れはそれから」と面談に難色を示した指導教員も若干いるが、他の指導教員は「学生がお世話になっています」と面談に協力的だった。留学生の受け入れ経験が初めての指導教員からはその後も問い合わせのメールが届き、三者面談の効果が実感できる。

指導教員が、受け入れる国費留学生に対して、２年ないし５年後には論文を書かせて帰国させなければならないという責任を感じていることは、面談を通して伝わってくる。入試と入学後に必要な日本語に関して来日後の早い段階で学生に伝えておくことは、指導教員にとっても円滑な受け入れという面で効果が大きいと考えられる。

７．問題点

三者面談は、三者それぞれに得るところの大きいプログラムであると言える。しかし、運営上いくつか問題点があり、今後へ向けての課題となっている。以下に問題点を述べる。

７－１　面談日程の調整

講義や会議で多忙な指導教員に電話しても研

究室に不在の場合が多い。不在の場合には、メールによる依頼に変えて、面談日程を調整しているが、アポイントメントを取るまでに大変時間がかかる。

7－2　場所

面談は基本的に留学生センターのコーディネーターの研究室で行っている。しかし、研修生の半年後に所属する研究室は九大の各キャンパス及び九大以外の北部九州に広がっている。さらに、現在新キャンパスへの移転が進行中であり、工学部は既に移転している。多くの指導教員は忙しい中時間を割いて留学生センターまで来なければならない。現在は留学生センターのある箱崎キャンパスでの会議や講義の日程に合わせる、福岡市内での用事と兼ねて日程を組むなどしてもらい、日程を調整している。今後移転終了まで面談実施場所の問題は一層大きくなると予想される。

7－3　方法（研修生からの希望）

面談終了後の研修生へのアンケートには、継続を望む声の他に、複数の研修生から下記の希望が寄せられた。

1）指導教員と話せる話題について学生に知らせておく。
2）質問したいことについての調査が前もってある。
3）面談直後に学生へのフィードバックを行う。
4）もし可能なら三者が理解できる言語で面談が通せる。
5）コース期間中に２回面談がある。

既に１）～３）の点は改善したが、４)・５)に関しては、今後の検討課題となっている。

7－4　汎用性

指導教員と研修生の間に立つコーディネーターの役割の範囲はまだ十分に整理されておらず、誰もが行えるという体制にはなっていない。指導教員は年齢が比較的高く、個性豊かなので、問題なく対応するのは容易なことではない。コースと研究室間の公的なプログラムと位置付けながらも、現状ではお互いの人間関係に負うところが大きい。今後を考えると、実施方法を整理して公開し、一般化を図ることが必要である。汎用化ができれば、コーディネーターが代わっても継続できるであろう。

8．今後へ向けて

三者面談には、日本語教育の面と適応支援の面でそれぞれに効果があることが分かった。

日本語教育の面での効果をまとめると以下のようになる。

① 研修生は、研究に関して先生から情報を得、今は日本語を頑張るように言われ、安定して日本語学習に打ち込むことができる。
② 研修コース期間の日本語学習に方向性を持たせることができる。特に、研修コース期間の日本語到達目標を話し合うことによって、研修生の個別の事情に合った日本語教育が行える。

適応支援の面での効果をまとめると以下のようになる。

① 三者の人間関係が築かれ、学習・生活両面で指導教員と連携して指導ができる。
② 研修生一人一人の異なった状況に対して個別の指導が行えるので、留学生センターから研究室への円滑な移行が期待できる。

留学生の日本での留学生活をスタート部分できめ細かに支援することは、その留学を実りあ

るものとするために有意義である。三者面談は、研究に備えた効果的な予備教育を行うために、困難な点を押しても継続する価値があると言える。

留学生センターには留学生指導部門があり、留学生への専門的な相談・指導業務を行っているが、研究室と研修コースを結ぶ三者面談は、日本語教育担当者のできる留学生支援であると考える[5]。コース終了後の留学生活を見据えた上で、大学院での研究に備えて日本語教育を行い、留学生センターから研究室への移行を円滑にするという点において、これは大学における留学生支援の一形態と言えるだろう。方法の改善と汎用化は今後の課題であり、更なる蓄積が必要である。

注

1　研修コースには、本文記載の経路で研修コース所属となる研修生の他に、学内募集を行って受け入れる研修生が入っている。学内募集で研修コースに入ってくるのは、学府が受け入れる国費の交換留学生、研究生として直接研究室が受け入れる留学生（出身国の奨学金を受けっとっている場合・私費の場合など様々）である。専門の研究に先立ち半年間の日本語教育を受ける許可を指導教員から与えられた留学生は、学内募集に応募することができる。

2　九州大学の研究留学生の実情に関しては、九州大学留学生教育・研究環境調査委員会（2003）『外国人研究留学生（大学院生および研究生）の教育・研究環境改善のための基礎的調査報告書』に詳しい報告がある。また、因京子・栗山昌子・上垣康与・吉川裕子（1999）「大学院レベルの日本語予備教育に求められるもの」『日本語教育』99号　pp.120-130にも報告がある。三者面談を実施するにあたり、以上の文献を参考にした。

3　発表会は毎学期末に行う口頭発表で、コースの集大成としての行事である。研修生は各自の専門について日本語を使ってプレゼンテーションをする。質疑応答を含めて一人20分。指導教員他、関係者を招待して行う。

4　教員研修生は、研修コースでの半年の研修後に福岡教育大学に移り、１年間教育関係の研修をして帰国する留学生のことである。毎年秋学期に数名受け入れている。

5　九州大学における留学生支援に関しては、スカリー悦子・白土悟・高松里（高松里編集）（2006）「2005年度　九州大学留学生センター留学生指導部門報告」『九州大学留学生センター紀要』第15号 pp.175-186を参照。また、留学生支援に関しては、横田雅弘・白土悟（2004）『留学生アドバイジング　学習・生活・心理をいかに支援するか』ナカニシヤ出版、を参照。